（別記様式3-1）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

授業担当者 紙谷喜則
所属/職名：農学部/准教授
氏　　名: 紙谷　喜則

授業科目名	食料環境システム学Ⅲおよび特論Ⅱ
研修先（国・地域） 滞在地	タイ・バンコク、コラート、バンコク市内、ラテャナカシマ
研修期間	平成28年8月16日～8月23日

〔研修の成果〕

学部・大学院で実施した、食糧環境システム学Ⅰおよび、大学院授業、品質マネジメント、食の安全研修などを習った学生の中で、海外に興味のある者を募集した。食品の取り扱いに関する科学的視点から、今後、食品産業が伸びて行く可能性の高い、タイの学生が受講しているHACCP,GMPの授業を受講した。英語による授業では、初日、2日目は英語の聞き取りと講師の訛りなどコミュニュケーションがうまく機能せず、理解が難しい様子であったので、しかたなく、途中に日本語の解説、英語によるおさらいを行いながら進めたことで、最終日には講師に直接質問したりするなど活発に討議ができた。
この授業では、日本語で修得したHACCP、GMPの座学を英語により再度受講することで、知識の定着と英語によるコミュニケーションを体験することを目指した。その手法としてタイのラジャマンガラ工科大学の学生とペアになり、ワークショップ（討論・発表）を行うなど、英語力が必要であったが、タイの学生と同等かそれ以上の英語力があることが判り、お互いの意思疎通を辞書片手に行うなど、積極的にコミュニュケーションを取る姿も印象的であった。今後、鹿児島県でも主要産業である食品の流通もグローバル化するため、英語によるコミュニケーションは重要であり、自身の英語が外人と通じる喜びを感じ、英語を習得する意欲が増したことが一番の成果かもしれない。また、帰国後も、タイ学生とプライベートでもメール・ラインで連絡しあうようになり、日常的に英語を使う生活になっている。
成果のまとめ
1. 英語の必要性を再認識した。
2. 海外の学生と交流することで、同じ世代の学生としての親近感が湧き、外人が遠い存在では無くなった。
3. 食品安全規格のを習いし、内部監査員資格（タイ国際食品総合研究所）試験に合格した。
4. HACCP,GMPのマニュアルを英語で作成するレベルまでは達しなかったが、読むことは可能である。
5. 事後講習にて、マニュアル作成要領を再確認し、地域食品産業への協力ができる人材になる可能性が高くなった。

〔今後の課題〕

タイの学生との交流が継続的に進められるように、今度は、日本（鹿児島）への交換留学などを行える資金を準備できると良い。

金を準備できると良い。
日本から留学生を3－6か月先に送り込んで、交流の土壌を作っておくと、田舎での生活をアシストできるため、留学制度を使えると良い。
今回は学部3，4年、大学院1，2年の4学年が参加してくれたため、24名になったので、タイの学生とペアを組めたが、毎年開催すると、1学年分しか集まらないためタイ学生3名に日本人1名でのグループになり、今回の様にワークショップを行えない可能性がある。食事のありがたみが判るかもしれない。ベストな人数は20～25名であるため、学生の募集のみでなく、食品会社にも募集を広げ、社会人も参加できるようにできるか検討すべきである。